



野外運動研究室ニュースレター

編集：筑波大学野外運動研究室広報係
発行：筑波大学体育系野外運動研究室
〒305-8574 つくば市天王台1-1-1
TEL/FAX 029-853-6339
URL <http://yagai.tsukubauniv.jp/>

【巻頭言】

「野外の名著に親しもう」

井村 仁

長い体験の夏が終わった。学生の皆さんは、海や山で様々な野外体験をし、いろいろと考え、悩んだことだろう。これからの季節、是非、夏の体験で心に残ったことを素に、野外に関する書物をたくさん読んでもらいたい。

ところで、新田次郎が書いた「聖職の碑」を読んだことがあるだろうか。新田次郎は、わが国の山岳小説の第一人者であり、歴史上の人物や事件を題材にした作品が多い。この小説も、実際に起こった山岳遭難事故を扱っている。今からちょうど100年前、1913（大正2）年、長野県中箕輪尋常高等小学校の生徒、教師ら37名が、中央アルプス木曾駒ヶ岳の学校登山を実施したが、予測できなかった悪天候の中遭難し、11名の尊い命が奪われた。「聖職の碑」では、学校登山に代表される鍛錬主義（実践教育）を主張する校長と、白樺派の理想主義教育を主張する教員との対立を描きながら、最後に「体験こそ人間を作るものだ。修学旅行という実践教育を、登山に求めようとするのはきわめて自然なことである」ということを、登山に反対した白樺派の教員に述べさせている。実際、学校教育におけるきわめて重大な事故であったにも関わらず、長野県では、その後も学校登山が益々発展していったのである。

「聖職の碑」は、学校登山の歴史ばかりでなく、野外教育の教育思想を考える上でも参考になる名著である。この校長は、長野県師範学校において、最新の直観教授・実践教育を学び、当時の教育界における知識偏重の教育に疑問を持ち、実践教育としての登山を行っていたのである。また、この基礎をつくったのは、東京師範学校で、1886（明治19）年にわが国最初の修学旅行を始めた高嶺秀夫であり、彼はアメリカで学んだNature Studyをこの修学旅行に反映させた人物である。余談だが、現在NHK大河ドラマの「八重の桜」で会津藩が扱われているが、官軍に敗れた会津藩及びその同盟軍の藩士から、明治の教育界で活躍した人物が多く出ている。高嶺は、会津藩主の小姓であり、長野県師範学校初代校長として教育界・長野の基礎を築いた浅岡一、長野県の学校登山・女子教育を推進した渡辺敏は、共に二本松藩出身の兄弟であった。

秋の夜長、いろいろと本を読んでいくと、新しい発見に出会うことができるだろう。果たしてあなたは、どのような名著と出会えるだろうか。

【正課事業報告】

○UG 野外運動論演習 I（キャンプ）

黒須 雄翔（UG3）

平成25年7月27日～8月2日にかけて野外運動論演習Iのキャンプに行ってきた。渡邊先生をはじめ、UG3の黒須、川崎、中村の四人で実習を行った。鳴沼でのテント生活、尾瀬国立公園でのテント泊を含んだ登山は想像以上に過酷であったが、その反面大きな達成感を味わうことができた。天候にはあまり恵まれはしなかったが、キャンプ、登山の魅力を十分に感じられた実習であった。

○MC 野外教育実習（キャンプ）

山川 晃（MC1）

大学院生対象の集中授業である「野外教育実習（キャンプ）」が、9月1日～7日にかけて、福島県南会津郡南会津町針生地区周辺で行われた。今年度は野外運動研究室所属の山川のほか他研究室所属の学生が11名参加し、指導者である渡邊先生、MC2の佐藤を加えた14名で鳴沼をベースとしたキャンプを行った。全日程を通して不安定な天候に見舞われたが、3日目のMTBや4、5日目の尾瀬登山でもほぼ予定通りのプログラムを行うことができ、自己の限界への挑戦や他者との共感などといったキャンプの醍醐味を味わうことができたといえる。はじめは鳴沼の放つ圧倒的オーラに気圧され気味の参加者たちだったが、その厳しい条件に柔軟に適応しつつ存分に楽しむことができ非常に盛り上がった実習となった。



至仏山頂にて（MC キャンプ実習）

○共通体育「キャンピング」

庄司 翔太朗 (UG4)

共通科目体育の集中授業「キャンピング」が9月23日～26日にかけて、筑波大学野性の森及び筑波山周辺で行われた。様々な学部の学生21名が参加し、指導スタッフとして、坂本先生・向後先生・MC2の加藤・UG4の庄司が帯同した。1日目以外の多くの時間は、不安定な天候の中での活動になったが、2日目のサイクリング、3日目のグループ別活動など大きな問題も無く、プログラムを行うことができた。はじめは悪天候のせいか、テンションの上まらない参加者だったが、厳しい条件下でのプログラムを通して、自己への挑戦、仲間との協力・助け合いの中で、参加者のたくましが格段にも高まったと感じられた。悪天候の中でも楽しむことを忘れず、キャンプの厳しさと楽しさともに感じられた4日間となった。

【課外事業報告】

○南会津アドベンチャーキャンプ

渡 元春 (UG4)

8月1日～5日、福島県南会津郡南会津町針生地区にてTOEL主催の南会津アドベンチャーキャンプが開催された。福島県を中心に23名の小学4年生から6年生までの子どもたちが参加してくれた。また、スタッフも筑波大学のみならず、東京女子体育大学からも3名が指導を行った。私は4班のカウンセラーとしてキャンプに参加した。子どもたちの中にはフランクですぐにグループに融け込んでいく子もいれば、緊張した様子の子もいた。しかし、プログラムを重ねるにつれ、リーダーシップを発揮したり、一歩踏み出す勇気を見せたり、子どもたちに変化が見られた。そんな変化に感動しつつ、「キャンプっていいなあ」という実に月並みな感想を改めて抱いた。スタッフも徐々に慣れていき、緊張気味だった他のカウンセラーがとても生き生きして見えた。これもキャンプの力であろう。そんな中、最後の夜に事件は起きた。悩める子どもに睡眠時間を献上し、私の活力は底を尽きた。私の活力がしっかり子どもに還元されたことを切に願ってやまない。



みどりの広場キャンプ場にて(南会津キャンプ)

○藤村女子高校キャンプ実習

安 柄泰 (UG4)

7月8日～12日の日程で八ヶ岳で行われた藤村女子高校キャンプ実習の指導を行った。今回の実習で初めてキャンプのスタッフを経験したが、思っていたよりも大変でキャンプを裏から支えることの苦勞を知った。ただキャンプ中や最終日に生徒から楽しかったよと声をかけられたりした際に苦勞と同時にキャンプを裏から支える楽しさも知れたのではないかと感じた。

またこの実習を通して一番に痛感したのは自分の野外に対する知識の少なさである。生徒が困っているときに質問をされても自信を持って教えてあげることの出来た場面はあまりなく、そういう点ではマスターの人たちに経験の違いを見せつけられたなど感じた。卒論や部活でこれからもっと忙しくなると思うが、野外の知識も磨いていきたいと思う。



設営オリエンテーション(藤村キャンプ)

○広島芸北小・中学校合同研修会

佐藤 冬果 (MC2)

8月21日、広島県北広島町芸北文化ホールにて行われた「芸北小学校、芸北中学校 第6回小中合同研修会」に、野外運動研究室から講師として坂本先生、向後先生、佐藤の3名が参加した。

この研修会は、小中学校の教育課程内へ、野外教育のような冒険的な活動を含む「挑戦科」の新設に向けた研修会であり、研究開発校として指定された両校の先生方およそ20名が参加した。研修会では、野外運動研究室OBでもあり、我が父でもある佐藤豊(鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会学系教授)による講義「挑戦科の可能性」、坂本先生による講義「冒険教育の理論的背景と手順」の後、2グループに分かれてワークショップ(室内でのASE)を行った。

私自身はASE指導を担当したが、グループ全員が現職の先生方というだけあり、非常に積極的に、前向きに取り組んでいた。また、活動の指導法についてや、レパトリーについてなどの質問もあり、「自分たちが指導することになったら」という視点を常に持たれていることが印象的であった。

個人的には父親が間近で見ている中でのASE指導

ということで、非常にやりづらい部分もあったが、ASE の効果や魅力を伝えることが出来たのではないかと思う。研究プロジェクトは今年度始まったばかりということだが、「挑戦科」のもつ可能性を感じた1日であった。

○Yes I Can! 2013

加藤 拓史 (MC2)

7月27～8日の12泊13日、国立妙高青少年自然の家主催のキャンプ「Yes, I Can! 2013」へ、坂本先生、山川 (M1) と共にスタッフとして指導にあたった。甲武信岳を登り信濃川の源流で旅の始まりを確認し、MTB、E ボート、手作りいかだで信濃川河口まで下った。グループ内でのケンカ、MTB 最終日には雨宿りをしなければならないほどの豪雨、さらに川が増水してカヌーができずにその分を徒歩移動、いかだが途中でパンクして崩壊しかけるなどのハプニングがあったが、結果的には川の流れにも助けられ全員が無事にゴールすることができた。

今回のキャンプでは、初めて複数のグループがある長期冒険型キャンプのスタッフをすることになり、それぞれのグループが全然違った成長の仕方をしていくことを目の当たりにすることができた。また、天気にとっても左右されたキャンプでもあり、移動型のキャンプであったこともあり自然の家の職員の方たちの様子を見ながらあらためてマネジメントの難しさを感じた。しかし、その分子どもたちは最終日にはたくましい顔つきになっていて、キャンプや自然の持つ力をとっても感じる13日間になった。



ボートプログラム(Yes I Can! 2013)

○TS - Camp

藤田 花子 (UG4)

8月28日～29日の2日間をかけて、自動車関連メーカーのTS TECH社のOutdoor Training Programが野性の森で行われた。参加者は22名で4班が編成され、キャンプ長に渡邊先生、食料+全体サポートには向後先生、ファシリテーターとして加藤・佐藤・山川・藤田が指導にあたった。30代から40代、体型も様々な人たちでチームが生まれ、活動した。ASEにおいて、課題解決に向けて面白いアイデアが次々に出され、テント設営や野外炊飯の際には、無駄の

ない動きで丁寧に、しかし迅速に作業を行っていた。さすがは会社の中で、現役で上に立つ人たちだ、と感じた。「ASEを通して、仲間との連携には信頼することが不可欠、これは会社でも当てはまること。見えていなかった見方があった。」と感想を話して下さったことが印象に残っている。

私の覚束無い発話も、温かい目で受け取って下さった。参加者が安心・信頼して活動できるよう、知識・技能そして何より話力の獲得に、一層の精進が必要だと思った次第である。

○尚美学園大学野外教育実習

清水 啓一 (MC2)

9月10日～13日、静岡県朝霧野外活動センターに於いて、尚美学園大学野外教育実習が行われた。実習責任者として渡邊先生その他、清水、加藤、井上先生(駿河台大学)が指導を行った。メインの活動内容は、野外生活、MTBサイクリング、登山等だった。このキャンプの特徴は、①学生のモチベーションが非常に高いこと(毎年履修希望者が定員を大幅に超えるため事前に厳しい振り分けが行われている)と、②リピーターの参加が認められていることである。そのためキャンプの進行はとてもスムーズであった。私自身はこのキャンプへの参加がこれで3回目だった。初年度は、意識の高い学生を前にして適切な指導ができていないか不安な場面もあったが、今年は落ち着いて3泊4日を過ごすことができ、なによりも自らが楽しむ余裕があったと思う。

最後に余談を。このキャンプに限らず私が過去に朝霧野外活動センターで行ってきた活動では、必ずと言っていいほど雨天にさらされてきた。しかし今回はなんと！一度も降られなかったのである。かねてから噂にはなっていたがこれはいよいよ、某W先生の低気圧伝説に終止符がうたれたのではないかと私は推理している。

【その他の課外事業】

○JFA S級コーチ養成講習会 野外研修 ASE

[期日]8月25日

[場所]静岡県静岡市日本平運動公園

○立正大学サッカー部 野外研修

[期日]8月8日

[場所]筑波大学野性の森

○東京成徳大学野外活動実習

[期日]9月15日～18日 3泊4日

[場所]群馬県おにし野外活動センター

○とわの森三愛高校 野外研修

[期日]10月12日

[場所]筑波大学野性の森

○芸術専門学群フレッシュマンセミナー

[期日]8月10日

[場所]山梨県筑波大学山中湖研修所

リレーコラム～OB・OGからのメッセージ～



リレーコラム NO.14

2000 年度卒業
秋田プロバスケットボールクラブ株式会社
専務取締役 高島 靖明さん

渡邊 仁先生と同期の高島(たかばたけ)と申します。同世代の中でもとりわけ優秀であった渡邊先生が筑波に戻って来た聞き学生時代の努力が実ったのことかと嬉しく思っています。今回「リレーコラム」という大役が回ってきて、久しぶりに大学生活を思い出してみました。親元を離れ少しタガが外れたとでもいいでしょうか、元来の好奇心旺盛な性格に益々磨きがかかった5年間だったと思います。体育会水泳部に所属しつつも、オフ中には仲間とキャンプを行ったり、海外での異文化交流を計るなど「最初のチャンスは、最後のチャンス！」(これは私のモットーです)といわんばかりに積極的に活動しておりました。そんな私の好奇心を更にかきたててくれたのが『野外運動研究室』でした。花山キャンプ、渡嘉敷島での実習などを通して、大自然の中での人間の無力さ、そして人間の偉大さを感じたことを今でも忘れられません。

今は縁があって日本プロバスケットボールリーグ「bjリーグ」に所属する秋田ノーザンハピネッツというチームの運営を行っています。出身は岡山県倉敷市、自身が行ってきたスポーツ競技は競泳、そして大学時代の研究室は野外教育と現在の仕事に至るまでの経緯を一言で語るのには難しいのですが、私の現在にいたるまでのアクションに共通しているのは『ワクワクする気持ち』を大切にしてきたことです。大学時代を振り返ってもこの気持ちを私の行動指針としてきました。現在、会社経営を行っています。当社のスタッフも仕事とはいえ「積極的に行う業務」と「あまり積極的に行わない業務」と無意識に選別して業務にあたっていることに気付きました。これは、「やる気になる業務」と「苦手なやりたくない業務」を選んでいるということです。以前はこの様なスタッフの姿勢を咎めてきましたが、ここ最近は受け入れることが出来るようになりました。スタッフも自然と同様にいつも生活に波風、浮き沈みがあるものです。そんなとき、野外活動のときは「雨が降っているししょうがないなあ」と気持ちを切り替えることが出来ていたのに、とかく相手が人間となると「何とかやらせたい」「無理にでもやってもらおう」と傲慢になっていたのかもしれない。自然も人間も同じ地球上に誕生した創造物です。私は野外活動を通してそんな『自然の法則』を知らず知らずのうちに学んでいたのかもしれない。

最後に学生のみなさんにメッセージです。学生時代は自分自身の『心の声』にしっかりと耳を傾けてください。社会に出るとたくさんの「雑音」に惑わされ自分を見失ってしまうことも経験するかと思います。そんなとき大自然の中で聞いた自分の『心の声』が何より頼りになると私は信じています。

★『スポーツで地域を拓く』(東京大学出版会)が2013年7月に発刊され、第7章に私の秋田での活動を紹介しています。ご一読いただければ幸いです。

<http://www.happinets.net/pdf/sports.pdf>



【編集後記】

長かったはずの夏休みも終わり、筑波にもすっかり秋らしい風が吹く季節となりました。今回のNLは夏の実践報告が主な内容となっています。現在の野外運動研究室員たちの様子を見て、ご意見・ご感想などがありましたら是非、野外運動研究室HPまでお願いいたします。

<http://yagai.tsukubauniv.jp/>

